

田畔遺跡

大規模古墳群の築造に関わった7世紀の集落遺跡

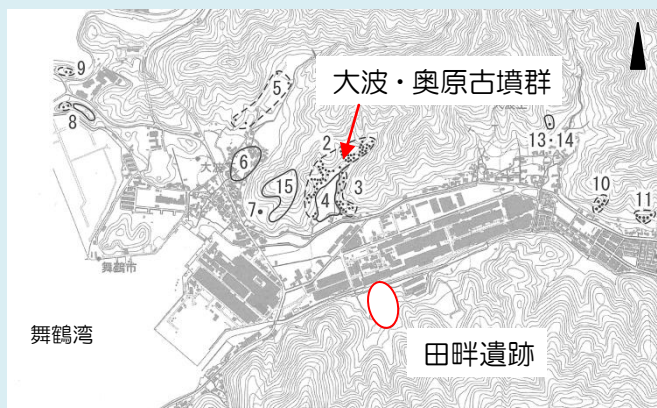
場所：舞鶴市字大波上

種別：集落跡

時代：縄文時代・弥生時代・古墳時代・飛鳥時代・奈良時代・平安時代・鎌倉時代

主な遺構：竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、溝跡など

主な出土遺物：須恵器、土師器、硯、墨書土器、土馬、土錘、石製品など



田畔遺跡は京都府・福井県境の青葉山の山麓から舞鶴湾に至る朝来谷^{あせく}に位置します。遺跡は朝来谷の南側山塊の裾部にあり、朝来川の河口から1 km 程上流の位置にあたります。これまでに平成 18・19・29 年度に発掘調査が実施され、遺跡の全体像が明らかになっています。

田畔遺跡で最も古い人々の活動の痕跡は、縄文時代に遡ります。住居跡などの痕跡は見つかっていませんが、これまでに縄文土器片が2点（内、1点は縄文時代後期後半のもので約3千年前）出土しており、朝来谷で縄文時代から人々の活動が始まっていたことが分かります。

田畔遺跡が集落として大きく発展するのは、7世紀（飛鳥時代）～8世紀前半（奈良時代）です。これまでにこの時期の住居跡と考えられる竪穴式住居跡（地面を掘くぼめた半地下式の住居）が合計30棟、掘立柱建物跡が11棟見つかっています。

また、集落の中心から南方の山側で古墳が1基見つかりました。小石室に人を埋葬する古墳で、奥行き（残存長）1.4m、幅0.5mを測ります。副葬品等、時期の分かる出土品がありませんでしたが、石室の形や住居跡との関係から、7世紀初めから中頃のものと考えられます。

この集落が飛躍的に発展した時期は、田畔遺跡から朝来谷の谷平野を挟んで北側に位置する大波・奥原^{おおば おくはら}古墳群^{こふんぐん}の築造時期と一部重なります。大波・奥原古墳群（総数78基）は、府北部でも有数の規模をもつ古墳時代後期の群集墳です。古墳群は6世紀末から7世紀代にかけて築造されたと考えられますが、田畔遺跡の集落もこの古墳群の築造に関係があったとみられます。

平安時代には、斜面下方の海に近い場所で、製塩土器^{せいえん}が多数見つかっていることから、塩づくりが行われていたことが分かりました。付近からは、硯や文字が書かれた墨書土器も見つかっていることから、文字を読書きすることができた役人や豪族^{こうぞく}（識字層）がいたと考えられます。

その後、田畔遺跡では平安時代末から鎌倉時代にかけての建物跡が複数見つかっており、



それを最後に集落は終わりを迎えます。

田畔遺跡は延べ1万500㎡に及ぶ面積を発掘調査したことで、遺跡の全体像が明らかになった貴重な事例です。中でも古墳群築造と関係する集落の様子が明らかになったことは注目されます。また、平安時代の塩づくりと識字層しきじそうの存在は、この地域の古代の様子を語る上で重要です。



古墳石室（平成 29 年度調査）



竪穴式住居跡群 7世紀（平成 18 年度調査）



竪穴式住居跡発掘風景



竪穴式住居内から見つかった整然と並べられた土器。祭祀の痕跡か。



土師器：甕 7世紀

土錘（網漁に使うオモリ）

須恵器：蓋 7世紀

土馬（祭祀の道具）7世紀



円面硯（すすり）9世紀



須恵器 墨書土器 9世紀

【参考文献】 『平成 18 年度田畔遺跡発掘調査報告書』 2008 年、『平成 19 年度田畔遺跡発掘調査報告書』 2008 年
『田畔遺跡第2次発掘調査報告書』 2019 年